

されるのも「二本足の直立するもの」という表象の類似性によってではなく、われわれ自身が生きていること (*se vivere*) を知り、さらに「ただしく生きること (*iuste vivere*)」の *regula* によって生きていることを知ることによってである。ここからして、*veritas* が *ordo vivendi* である所以も明らかである。それはわれわれの存在が本来そのようにあるべく造られている *regula, leges aeternae* の根拠であり、回復されるべき本然の性 (*natura*)、還帰すべき終極を告示することによって、行為を総体的に規制するものだからである。

さて、このような存在の諒解、また、存在の根拠の諒解の道はまさしくプラトン哲学の道であった。またプラトン哲学の勝義における受容と変貌の過程で生れてくる哲学の道であった。この意味においてアウグスティヌスはプラトン哲学の正統の後継であったと云うるのである。

問題1 アウグスティヌスにおいて *veritas* は時間の根拠を含み、個物の存在をその *incipere* と *desinere* において限定する規範として働くと考えられるが、このようなことはプラトン哲学の枠組のどこかに収められうるであろうか。『ピレボス』篇の *τέραπρον γένος* をどのように解釈すべきかが問われてくるであろう。

問題2 アリストテレスの自然学書、形而上学書の流入と共に起った、いわゆる「13世紀革命」がアウグスティヌスの著作に保存されていたプラトンの哲学の良き種を踏み潰すことはなかったのか。われわれはいまアリストテリズムの得失の再検討を迫られているのではなかろうか。

提題

12世紀のプラトニズム

大谷 啓治

クレルヴォーのベルナルドゥスの弟子サン・ティエリーのギョームは、『コンシュのギョームの誤謬について』の中で、「コンシュのギョームは新しい哲学を提唱する」(P.L., 180, col. 333), 「自然学者、哲学者たる人間が神について自然学的に哲学している」(同 col. 339) と非難の声をあげている。

シャルトル学派におけるこの「新しさ」、すなわち「自然科学的に哲学する」ということがどのように生まれたか、そこには種々の影響が考えられるにせよ、とくに『ティマイオス』が密接な関係を持つことはいうまでもない。『ティマイオス』と『創世記』の親近性に気づいたのはこの学派がはじめてではないが、救い主としての神よりも、創造主としての神に興味をいだくシャルトルの人々にとって、「自然的正義すなわち世界の創造」(コンシュのギョーム、『ティマイオス』註釈 ms. Marciano, f. 2r-2v) を内容とするこのプラトンの著作は格好の典拠となった。

『ティマイオス』の中でも、とりわけ 28-29 の箇所が原因探求あるいは原因にもとづく理解の重要性をシャルトル学派に示唆する。とくに「生成するものはすべて必ず何らかの原因によって生成するのでなければならない。なぜなら、どんなものであれ、原因なしに生成することは不可能だからだ」(泉治典訳) という箇所の影響は大きく、この後半の「原因」を *legitima causa et ratio* とするカルキディウスの翻訳やボエティウスの影響もあり、シャルトル学派の人々は、四原因にもとづいて世界を理解しようと試みている。たとえば、コンシュのギョームはこの箇所を註釈し、「世界の四原因、すなわち動力因、形相因、目的因、質料因を示し、これらの原因から何か永続的なものが創造されうることを明らかにする。動力因は神の本質、形相因は神の英和、目的因は神の善性、質料因は四元素である」(『ティマイオス』註釈 ed. Parent, p. 142) と述べる。またシャルトルのティエリーの『六日間の業について』は、「世界の事物の原因は四つ、動力因すなわち神、形相因すなわち神の英知、目的因すなわち神の善性、質料因すなわち四元素である」(ed. Haring, AHDLM A 1955 XXII, p. 184) という言葉で本文が始まっている。同様にソールズベリーのヨハネスによれば、「(プラトンが) 世界の諸原因をより深く探求しながら、動力因を神の権能に、形相因を英知に、目的因を善性にすえることで、神なる三位一体を表現しているのが明らかに見られる」(*Polycraticus*, VII, 5, P.L., 199, col. 645)。

これらの引用で示されるように、世界の原因を四とするばかりでなく、動力因、形相因、目的因を神の三位一体としてとらえることにより、『ティマイオス』と『創世記』の間にはっきりとして親近性をみてとるのが、シャルトルの特徴である。事実、シャルトルのティエリーは、上掲の引用に引続いて、「創造主みずからが初めに無から創造した四元素」という表現で、無からの創造という立場を明らかにし

た上、『創世記』を解釈し、「いと高き三位一体は、動力因として質料そのものを創造し、形相因として、創造された質料に形を与え、配置し、目的因として、形を与えられ、配置された質料を愛し、治めることにより、四元素たる質料において働く。父は動力因、子は形相因、聖霊は目的因、四元素は質料因だからである。これら四原因から、すべての物体的実体は存在を有する」と述べている。(こうしたシャルトル学派のいわば自然学的三位一体理解が、『コンシュのギョームの誤謬について』の中で、主要な非難的になっている)。

さらにカルキディウスによって *opifex* と訳されているデミウルゴスを、コンシュのギョームが創造主と同一視して解釈していることは、「*opifex* なる神、すなわち創造主」(『ティマイオス』註釈 ed. Parent, p. 154)、「質料なしに生み出したがゆえに創造主たる *opifex*」(同 p. 152) などの箇所から明らかである。(当時、キリスト教の神とプラトンのデミウルゴスが異なるものだという意識を持った人のいたことは当然である。たとえば、サン・ヴィクトルのフーゴは、「われわれの著者たちと哲学者たちとは、哲学者たちが神をたんに *opifex* として、三つの原理すなわち神、質料、原型たるアイデアを置いているのに、われわれの著者たちは唯一の原理、すなわち神のみを置く点で異っている」(P.L. 175, col. 33) とし、またペトルス・ロンバルドゥスも「プラトンは三つの始原あるいは原理、すなわち神、範型、質料を考え、質料自体は創造されたものでなく初めを持たず、神はいわば *artifex* で創造主ではないと考えていた」という解釈をあげている(『命題集』第2巻第1分類, P.L. 192, col. 651)。

しかし、シャルトル学派の原因にもとづく自然理解は、こうした世界の創造 (*creatio mundi*) に関してよりも、とくに世界の装飾 (*exornatio mundi*) に関連して、特徴的にあらわれる。M. D. シュニユのいう12世紀における「自然の発見」を主として学問的な面でになったシャルトルの人々は、創造における神の無限な力は認めながらも、世界の装飾にあたっては、第二原因、すなわち創造された自然に自律性を賦与しようとする。神が四元素からなる質料の創造者であることを認めた上で、感覚によって把握される世界の生成については、自然法則の研究を通じて、『創世記』の物語を自然学にもとづいて (*secundum physicam* シャルトルのティエリーの言葉) 解釈しようとするのである。

この場合、『ティマイオス』の40～42あたりが典拠となるが、とくにカルキディウスが翻訳にあたって、39の終りの部分から第二部として分け、そこで装飾が論じられているとしたことは、重大な影響のもととなった。しかも、とくにその註解23章の有名な箇所、「すべて存在するものは、神の作品であるか、自然の作品であるか、自然を模倣する技術者としての人間の作品かである」における三つの働きの区別は注目に価する。コンシュのギョームはこの区別にしたがって、創造主の活動と自然の活動をはっきり規定しようとしているからである。「創造主の働きは、諸元素や精神の創造といったような、あらかじめ存在する質料のない第一の創造か、乙女の産出等といったような、自然の通常の過程に反して生じることのある事柄かである」(『ティマイオス』註訳 ed. Parent, p. 147)。すなわち、質料の創造と奇跡とが創造主の働きとみなされている。

それでは、自然の働きとは何か。自然は「事物に内在し、類似のものから、類似のものを作り出すある力」であり、「自然の働きは、類似のものが類似のものから産まれることである」(上掲箇所)と定義される。ここには、アウグスティヌスの *rationes seminales* の伝統をみることもできるであろう。しかし、コンシュのギョームは、たんに同一種の多数化を考えているだけでなく、『世界の哲学について』、とくにその第1巻21章、22章などにおける星の生成や生物の誕生に関する叙述をみると、神に協力して、宇宙の創造の完成、すなわち装飾の仕事を引きうけるところに、自然の働きを認めている。第一原因たる神によって存在を与えられた以上、この創造された質料の以後の生成、発展は第二原因たる自然の働きであり、この働きの探求、すなわち理性にもとづく自然学的理由づけが必要とされる。

こうしたシャルトル学派の自然研究には、カルキディウスの『ティマイオス』註解、マクロビウスの『スキピオの夢』註解など古典的なもののほか、コンスタンティヌス・アフリカヌスなどによって紹介されるようになったアラビア、ギリシアの医学や自然科学の新知識が重大な役割を果していることもたしかである。

いずれにせよ、『ティマイオス』と結びついたこの自然学的プラトニズムは、アウグスティヌスの伝統にはない新しい要素を含んでおり、中世におけるいくつかのプラトニズムの中でも、かなり独自のものとみることができるであろう。プラトニズムが、アリストテレス自然学の導入以前に、自然の学問的研究をになつたという

ことは、ある意味で驚くべきことであり、またこのプラトニズムとルネサンス思想とにある種の連続がみられることは、きわめて興味深いと思われる。

提題 ルネサンスのプラトニズムについて
 ——プラトン著作の受容を中心として——

清 水 純 一

ルネサンス期のプラトニズムを代表するものとしては、16世紀後半のフィレンツェに栄えた、フィチーノを長とするいわゆるプラトン・アカデミアのそれをあげるのが一般であろう。しかし総体的にみれば、プラトニストとよばれる者は、オトルクールニコラウスやクサーヌスなど、各地に散在し、さらにアウグスティヌスやマクロビウスやポエティウスらを介して間接にプラトニズムを継承する人々をも含めれば、きわめて広汎多岐にわたる。ここでは、プラトンの著作が、直接的に、どのような径路を辿ってヨーロッパで読まれたし、その影響力を浸透させていったのか、という点を中心に考察をすすめたと思う。したがって、まず、ペトラルカ以後、とくに15世紀前半のフィレンツェでプラトン著作がラテン語訳されていった道筋を中心にその跡を辿りながら、その大成者たるフィチーノに及ぶことにしたい。

I

ルネサンス・プラトニズム興隆の祖として最初にあげられるべき者は、Petrarca (1304-74) である。彼が古代心酔者として古典の蒐集に熱中したことは、あまりにも有名で、プラトンの著作集についても二種類のギリシア手稿を入手し、折に触れてプラトンの偉大さを説き、著書『勝利』のなかでプラトンをアリストテレスの右においたことは、プラトニストとしての名声をあまねく知れわたらせた。しかし、ペトラルカがプラトンの著述そのものからどれほどの影響を受けたかはかなり疑問で、ギリシア語をほとんど読めなかった彼にとって、手稿は「物言わぬ紙」であったし、当時目にしうるラテン語訳といえば、『ティマイオス』『メノン』『パイドン』